「ヤダッ・・・!も、ヤダぁぁっ!」

私は藻掻きながら必死にシーツを掴み、私を組み敷く男から逃げ出そうとする。しかし私が身体を捻った瞬間、お尻を強く打たれて、腰をガシッと強く掴み直された。

「おいおい動くなよー。そんな腰くねらせたらまた悦いとこに当たっちゃうだろ・・・がっ!」

ーーードチュッ・・・!

勢いを付けて腰を打ち付けられれば、一瞬息が詰まり、そして強烈な刺激を受けて頭の中が真っ白になる。

「ひっ!あぁぁぁーっ・・・!ぁっ、だ、めぇぇっ!そこあてちゃ、だめなのぉ・・・っ!」

納得していないセックスにおいては忌まわしい弱点とも言えるそこを狙って穿たれると、身体はいとも簡単に屈服してしまいビクビクと跳ねる。犬の交尾のような体勢で後ろから激しく腰を打ち付けられれば、逃げる事も出来ずにただ涎を垂らしながら言葉にならない情けない声で喘ぐことしか出来なかった。

「駄目?ハハハ、嘘つくなよ。歩実の中は堪んない〜♡ってウネってるけど?ほら、鏡で確認してみろよ♡」

「っぅぁぁっ、ゃ、やめてぇぇ・・・っ!」

顎を掴まれて無理矢理に前を向かされれば、真っ赤にした顔をぐちゃぐちゃに歪ませた淫らな女が映っている。鏡の中の快楽に溶かされた情けない女は、男が動く度に歯を食いしばりながら立て続けにイキまくっている。一言で表すなら、ものすごく酷い醜態。目を背けたくなるほど情けない姿だ。

「ほらなー?悦い顔してるだろ♡最っ高にエロい♡」

掠れた声で囁かれれば、感じたくもないのにゾクゾクとした刺激が背中を登ってきて、つい腰を揺らしながら中にいる存在を締め付けてしまう。こんな自分が情けなくて、悔しくて、仕方がない。

「ひあああっ！・・・っゃめ、もうっ！本当に最低！このっ・・・最低ゴミクズ男！」

「・・・へぇ？」

快楽に溺れた回らない頭で、痴態を晒してしまう自分自身への怒りに任せて暴言を履いた途端、男の声色が変わる。今までのふざけて揶揄ってきていた声とはまるで違う。地を這うほど低くて、ゾクリと鳥肌が立つような声だった。

「俺のことそんな風に思ってたんだー？」

堅く低い声で呟くと、身体を起こしながら、男はゆっくりと私から離れていく。

「ち、ちが・・・今のは・・・」

慌てて否定しようとしたが、鏡で絡んだ視線は酷く冷たい刃物のようだった。

「ッ・・・！」

「今日はもう良いわ。お疲れー」

射精もしていないというのに、男はアッサリと私から離れるとギシリと音を立てながらベッドを降りて、そのままシャワー室へと消えていった。

「ま、待って・・・！待ってくださいっ・・・！」

慌てて身体を起こして男の後を追う。本気で怒らせてしまったようで、心臓が凍ってしまいそうな程の恐怖を感じる。私は一気に冷えた身体と頭の中で、半月程前の出来事を思い出していた。

・・・・・・・・・

父親の借金が発覚したのは、父親の葬儀の時だった。いきなり乗り込んできた柄の悪い男性達から聞かされたのは、父の友人が行方しれずになったため、連帯保証人である父親には一億もの莫大な借金ができたという事だった。

『美人姉妹だねぇ』

男性達の舐め回すような視線には心底吐き気がした。母は父が亡くなってすぐに心労で倒れてしまい入院中。優しい祖母は眼が悪く出歩くことは難しい。そんな状況で、十歳も離れた妹を守れるのは、私だけだった。

「責任者の方とお話をさせてください」

どうやったって彼等から逃げられないと腹を括った私が連れて来られたのは、意外にも普通の雑居ビルの中に入っている、一見すると普通の事務所だった。勿論中にいたのは黒いスーツのスキンヘッドの男性達だったが。そしてそこで初めて、彼に出会ったのだ。

「初めまして、歩実ちゃーん。俺は新山晴哉でーす。あーっと、責任者だっけ？（笑）やってまーす（笑）」

新山と名乗ったその男は、目が隠れる程に長い前髪をしているにも関わらず、ひと目で整った容姿をしているのが分かるような優男だった。妙に明るい口調に、幾つもあいたピアスに少し垂れ目な事がチャラそうな雰囲気を創り出していた。周りを取り囲む男性達よりもニ周りほど若い風貌ながらも、皆が彼の方ばかりを気にしていることから、彼がこの中で誰よりも尊重されるべき人物だということは直ぐに理解できた。

（こんな女性に不自由して無さそうな人なら、私の提案を受け入れてくれるかもしれない）

打算的な考えから新山の整った外見を見てホッとした私は、お腹に力を入れて話し始めた。

「新山さんに折り入ってご相談があります」

すると債務者にはよくある事なのか、またかと言わんばかりの嘲笑的な態度で新山はソファへと深く座り直した。

「えー？何何？借金の減額以外なら相談のるけどー？務め先の斡旋の相談ー？今なら風俗かー、デリヘルかー、キャバとか選び放題だよ～♪」

笑顔にも関わらずジロリと睨まれると、息がし辛くなるなほどの迫力がある。

「わ、私を買って貰えませんか・・・！？」

私の言葉を聞いた途端、事務所の中が一気に静まり返った。そしてその直後、彼は肩を震わせながら笑い始めたのだ。

「あっははははは！」

暫く爆笑した後で、新山は涙を拭いながら私を見やる。

「・・・本気？」

私は視線を交えたまま、コクリと頷いた。こんなこと、冗談では言えない。普通の会社員である自分にはとてもじゃないが一億円など死ぬ迄に払い切れると思えない。入院中の母と、まだ学生である妹の幸せな未来の為に、私は自身を一億円で売りに出すことにしたのだ。

「っ本気です！本当に何でもします！お願いします！」

私はガバッと頭を下げた。しかし・・・

「ふーん？それってさ、頭下げてるつもり？」

ニヤニヤしながら言われたその言葉にサァ・・・っと頭が冷えた。そうだ。ここは私が今まで生きてきた"普通"の世界じゃ無いんだ。

私は革張りのソファから立ち上がると、テーブルを避けて床に膝を付いた。

「・・・お願いします」

指を付けて、カーペットに額が付くほど頭を下げると、自分の心臓の音がより大きく聞こえてきた。これでも駄目なら、私は一体どうなってしまうのだろう。この捨て身の提案が受け入れられない最悪の事態を想像して、指先が冷たくなっていく。暫くは静か過ぎて、カチ、カチ、と時を刻む時計の針の音しか聞こえなかった。一秒がこんなにも長く感じるだなんて初めてだな、そう思っていると・・・。

「うん。良いよ～」

「・・・え？」

覚悟していたよりも余りに軽い返事に、私は顔を上げるとぽかんとした間抜けな表情で彼

を見上げた。それは周りのスーツ姿の男性達も同様だった。彼等の思っていた返事とも違っていたらしい。ただ、新山だけは相変わらずニヤニヤしたまま、私を上から悠々と見下ろしている。

「何でもしてくれるなら、良いよ？」

足組みした長い脚に頬杖をつきながらニヤニヤと笑っているこの男が、一体何を考えているかなんて分からないけれど、何はともあれ随分とご機嫌な様子だ。新山の反応は予想外ながらも、前向きなことは渡りに船だ。私は新山の気が変わらない内にと、畳み掛けるように自己アピールを始める。

「も、勿論何でもします！いえ、出来ます！掃除に洗濯に料理に書類整理に、犬の散歩とか、それからそれから・・・！」「ストップ」

私は自分が出来る限りの役に立ちそうな仕事を羅列していくが、唐突に顔の前に手のひらを突き出されて遮られた。

「うーんと・・・ねぇ、それ本気で言ってる？」

彼は顔を手で覆いながら項垂れている。

「っ本気です！本当に何でもしますからっ！」

突き出されていた彼の手を握り締めながら、ひょいと彼の顔を覗き込む。彼ほどモテそうな男性であれは女性関係には不自由していないだろう。だからこそ、私は労働力で彼に自分を買ってもらおうと思ったのだ。

「今まで病気一つしたこともないです！体力には自信があるし健康なので末永くお世話が出来ると思います！！」

再び深く頭を下げれば、「・・・へぇ？」という溜息混じりに漏れたような相槌。しかしその直後、私の耳には信じられない言葉が聞こえてきた。

「何でもさするんならさ、今ここで俺のこと誘惑してみせてよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあっ！？」

数秒後、言葉の意味を理解した私が勢い良く顔を上げた時、彼は真顔だった。その冷たい視線に怯みかけるが、私はグッ、と奥歯を噛み締めて尚も食い下がる。

「あ、あの、でも私は家事とか、掃除とかが得意で」「俺そういうの求めて無いから」

提案はにべも無く断られて、私は頭の奥が真っ白になる。どうしても、私はここで自分を売りたい。部屋の中には十人ほどの男性がいる。今ここで、彼等の目の前で、誘惑とやらをしなければならないのだろうか。

「俺エロい女が好きなんだよねー」

コツ、コツ、と近付いてくる革靴の音に、ビクリと身体を強張らせる。目の前に立ち塞がるように立たれて、首が痛いほど見上げることになるが、それでも彼から視線を外すことが出来ない。新山はそのまま膝を折り曲げて深く座り込むと、私の顔をまじまじと見つめた。

「ん、顔は満点合格〜♪どうする?今ここで俺のこと誘惑してみる?それか、このまま俺等の仲介する店に連れてっても良いけど・・・」

本当にどうでも良さそうに笑いながら、彼は元いたソファへと腰掛ける。彼の両隣にも、私の後ろにも、ドアの前にも、屈強そうな男性達が仁王立ちしながら私の事を注視している。逃げる事は叶わないだろう。私はこの先の事を想像して、コクリと喉を鳴らした。

「・・・誘惑させてください」

「アハハハ!根性あるねー・・・いーよ?はい、ドーゾ」

しかしそう言いながらも新山はソファに座ったまま気だるげに脚を組み、そのままスマホをイジり始めてしまった。

「あ、あの」「あ、俺忙しいからご自由にどーぞー?」

私が声をかけようとすると、彼は一目もくれずに返事を返してきた。まるで興味の無さそうなその態度に心が折れそうになるが、しかしここで諦めてしまえば家族の幸せな未来は無い。私はゆっくりと立ち上がると、彼の足元まで進み、そのまま膝を付いた。彼を見上げながら、ソッと手を伸ばす。

ーーーチョイ、チョイ

スラックスの裾を指先で引っ張ってみる。特に反応なし。
私は彼の顔を観察しながら、裾から覗く踝へと指を這わせた。

ーーーぴくん

彼の眉が僅かに反応するのを、私は見逃さなかった。

ーーーすりっ・・・♡カリ・・・カリ・・・♡

骨の形に沿って指をそっと這わせながら、時折爪先で引っ掻いてみる。すると、やっと新山がこちらへ視線を向けてきた。私は瞳を細めて、僅かに微笑む。彼の視線を奪ったまま僅かに唇を開いて小首を傾げれば、新山はハッとしたように顔を強張らせた。

きっと今、私のこと頭の中で犯したんでしょ。

私は今度は挑発的に新山を嘲笑いながら、立ち上がって彼を見下ろした。新山は私から目を話すことが出来ないかのように、視線で追い掛けてくる。

「今度は何点ですか？」

小首を傾げて勝ち誇ったような顔をすれば、新山は苦虫を噛み潰したような顔で嗤う。

「アハハハ・・・生意気ー。まさか家事希望の子にその気にさせられるなんて思わなかったなぁ。でもまぁ、ブチ犯したくはなったかな♡」

「ッ！？」

新山は私をヒョイと肩に担ぐと、事務所にあった大きめの事務机の上に私を降ろした。細身ながらも恐らくは相当に鍛えているのだろう。
片足を膝裏からグイッと持ち上げられて、私は思わず短い悲鳴をあげた。

「きゃ・・・！」

スカートがずり上がり、危うく見えそうになっていた下着を慌てて手で隠すが、噛み付くようなキスを落とされてあっという間に意識を持って行かれた。口の中全部を犯されるような乱暴なキスなのに、快楽を引きずり出された身体はどんどん熱くなり、頭の中は次第に彼で埋まっていく。

「んぅっ・・・♡ンンっ♡・・・ん、は、ぁぁぁ♡」

甘えた様な甲高い声と、クチュクチュという唾液を交換する音が混ざりあった部屋には、むわりとした色情が満ちていく。

「なんだ。かなりノリ気だったんだー？」

ギラついた瞳で熱く見据えられながら、硬く猛ったものを下着越しに擦りつけられる。下着は既にぬる付いていたため、ズリュッ♡ズリュッ♡と何の抵抗もなくその刺激を受け入れてしまう。

「ヒッ・・・ぅぅ・・・ング・・・ぁぁぁっ・・・♡ゃめ・・・！こんな、他人がいっぱいいる場所で・・・！ちょっと、まって・・・って、え？」

流石にこれ以上はと慌てて周りを見渡すが、先程まであんなに強面の男達がいっぱいだったというのに、いつの間にか部屋の中には私達二人きりになっていた。ポカンとする私を、新山はニヤリと笑いながら見下ろしてくる。

「外には居るから、あんまり大きな声出すと聞かれちゃうかもよー？」

「あぁっ・・・ッ、ん・・・ン、んぅぅっ・・・」

甘くビリビリとした刺激に襲われて、つい声を出してしまうが、新山の言葉を思い出して慌てて口を噤む。しかし、尖ったクリトリスを硬い昂ぶりで下から上へと何度も擦りあげられていると、次第に蜜壷がヒクヒクと戦慄きはじめてきた。

「家政婦でも良いだなんて、こんなやらしー身体しといてよく言えたよねー？」

「ひゃぅぅっ・・・！？」

シャツごと胸を鷲掴みされ、私はその乱暴な手付きに思わず身体を跳ねさせる。一瞬電気が

走ったかのような衝撃が身体を駆け抜けた。

「ぅぁあッ・・・ぇ？ぁ、ぁれ？」

中がビクビクと痙攣している。自分の身に何が起こったのか分からず、私は混乱したまま新たな蜜をこぷりと漏らした。

「ハハッ、軽くイッてんじゃん♡うーん、こんなイイ身体してる女をすぐ店に出すのは、確かに勿体無いなー♡」

下着をズラされて、ピトリと充てがわれた。いきなり現れたのはそれなりに経験がある私でさえ見たことがないほど太くて、腹に付くほどに反り返った凶悪な形のものだった。思わず、喉がひくりと痙攣する。

「む、無理・・・そんなの・・・入んない、です」

イヤイヤと首を振れば、新山は怖い顔で嗤う。

「アハ♡嫌なのー？でもさー俺の世話がしたいんなら、喜んでむしゃぶりつくくらいしなきゃだよ♡言ったよね？俺、エロい女が好きだって」

新山はその昂ぶりをペチペチと秘裂に叩き付けると、解してもいない孔へと先端を突きつける。ググッと押し付けられれば、存分に濡れているためにツルリと滑る。蜜を湛えた孔はその刺激にハクハクと悦んでしまうが、しかしいきなりこんな凶悪なものを挿入されたら、裂けてしまうかもしれない。

「ぁあっ・・・ちょ、ちょっと・・・待って！く、口で！まずは口でさせてください・・・！」

その恐ろしい程の存在感を放つものから少しでも距離を取りたくて、ずりずりと身体を引くが、腰を掴まれてあっさりと元の位置まで戻されてしまった。

「えー、そんなに舐めたいの？舐めるの好きな淫乱ちゃんなんだー？♡」

ニヤニヤしながら揶揄われる。

「そんな事はっ・・・！」

"無い"と言いたいところだが、このまま突っ込まれるよりはマシだ。私は歯を食いしばりながら頷いた。

「・・・は、はぃ。私、舐めるの大好きなので・・・ペロペロさせて、ください」

表情は引き攣っていたかもしれないが、それでも新山は満足そうに頷くと、持ち上げていた私の脚を解放してくれた。

「そこまで言うならしょーがないなぁ♡じゃぁ、そのまま机の上に寝転んで?」

「へ?あ、ぁ、分かりました・・・?」

私は広いデスクの上に脚を垂らすようにして寝転ぶ。しかし新山は私の腕を引っ張ると、頭がガクンと落ちるほど身体をズラしてきた。

「きゃあああ・・・!!ッ、え!?」

落ちる・・・!と思って目を瞑ってジタバタ暴れていた私を、新山は無理矢理に上から押さえつけ、私の顔にぺたりと熱い塊を押し付けてきた。

「ヒッ・・・!ぁ・・・ぁ・・・っ」

先程初めて見た時から恐ろしい程の存在感だったのだが、間近で見ると赤黒い色や、浮き出た血管は酷く生々しく、それらがなお一層の恐怖だった。私は逆さのまま、ゴクリと喉を鳴らす。

「そのまま、アーンして待ってて♡あ、因みに俺は俺で勝手に愉しませてもらうから♡抵抗とか萎えることだけは止めてね〜?♡」

新山は自身の大きな屹立を唇にムニムニと押し付けながら、私が着ているシャツのボタンをプチプチと外していく。

「な、何を・・・ンムッ!?ぉ・・・ぉぉ・・・んぉぉっ!?」

戸惑う私が口を開いた途端に先端をグッと挿し込まれてしまった。その余りの大きさに息

苦しくなり、途中で首を捻って逃れようとするが、すると更に奥までググッと咥えこまされてしまう。

「あはは♡口小せえ～♡噛むなよ？うわ♡やった、乳首ピンクー♡ちょっと陥没っててカワイー♡」

直接的な辱めの言葉に顔を赤くする暇もなく、私は息苦しいこの時間がせめて早く終われば、と、懸命に舌を絡める。しかし大き過ぎて咥内がいっぱいの為、自分の舌でさえ自由には動かすことが出来ない。その間に新山は私の膨らみを手でムニィッと挟み上げながら、「出ておいでー♡」などとふざけた声掛けをしてくる。爪先でカリカリと先端を軽く引っ掻かれると、身体は否応なしに反応し、先端は直ぐにプックリと膨れてピンッ♡と顔を出した。

「アッハハハ♡出てきたー♡ヤバ♡何このエロ乳首♡」

新山は私の乳首を指先ですりすりと扱きはじめた。焦れったい程の力加減でジワジワと刺激され、敏感になってきた所を、キュッ♡と摘み上げられると、腰が浮くほど感じてしまう。

「ふぐぅっ・・・♡ぅぐ・・・！ん、ンンッ・・・！」

胸の先からもたらされる甘く痺れる快楽に流されてしまいそうになりながらも、必死で口の中に意識を集中させ、丹念に奉仕する。何度も嗚咽する程苦しいが、恐らくこの男を満足させるまでこの行為は終わらないのだろうから仕方が無い。私は覚悟を決めて、自ら喉奥へと彼を迎え入れる。

「ンぐお・・・♡」

喉奥を擦られた途端に下品な声が漏れてしまう。これでは私が喉奥まで咥え込んで感じていると思われてしまうかもしれない。でも、新山の屹立が更にグンと大きくなったので、直ぐに何も考えられなくなってしまった。

「うーわ♡そんな奥まで咥え込んでくれた娘は初めてだ♡苦しくないの？」

乳首をピンッと弾かれながら尋ねられるが、くぐもった声しか出せない。

「ぅグゥ・・・ンング・・・ッグゥ」

「ふはっ♡喉奥締まった♡イイね♡俺のこと、もっともっと気持ち良くして〜?♡」

ゆるゆると腰を穿たれて、その大き過ぎる圧迫感に空気を求めて口を大きく開けば、より奥まで入り込んでしまう。

「あ〜イイね♡締まる締まる♡気持ちいいよー♡こんなに頑張ってくれてるし、俺もちょっとお返ししたげるね〜」

グッと身体を倒されたかと思えば、太腿で顔を固定された。これではどうやったって逃れる事は出来ない。一瞬パニックになりかけるが、更にそのまま、両方の乳首をコリコリと強めに弄られ始めた。

「ングッ!?ッうぐぅぅ・・・!?」

酷い事をされているという自覚はあるのに、絶妙な強さで両胸の先をグリグリ、ギュムギュムと弄られていると、お腹の奥がジンジンするような危ない快楽が生まれてくる。そうやって胸への刺激を受けるたび、いつの間にか喉奥を締め付けて、新山を喜ばせてしまっていた。

「あっは♡いーねいーね♡歩実ちゃんの喉まんこ最高だわ♡乳首虐めるたびに嬉しそうにチンコ締め付けてきてさー。あー・・・ヤバ♡久しぶりに興奮してきた♡」

新山はグン、と屹立を太くさせると、私のスカートを捲り上げる。

「ちょっと歩実ちゃーん!彼氏居ないのー?今度からはもちっと唆る下着着けてきてねー?」

勝手な事を言う新山に文句の一つもぶつけてやりたいが、先程より反り返った昂ぶりに、だらしなく涎を垂らしながら息をするのがやっとな私は言葉を発することが出来ない。だというのに、新山は喉奥をゴツゴツと小突きながら「返事」と端的に催促しつつ、乳首をギュムリと抓り上げてきた。分かりやすく暴力的な刺激に、私はくぐもった悲鳴を上げながら、新山の太腿をパシパシと叩き限界を伝える。

「フグゥゥッ・・・ンンッ・・・!グゥゥッ・・・!」

「あはは、苦しいのー?」

他人事の様に軽い態度だったが、しかし咥内を犯していた大きなそれはズルリと引き抜かれた。やっと新鮮な空気を吸うことが出来て、私は一人咳き込みながらゼェゼェと息を整える。しかし、そんな私の目の前に新山は再び昂ぶったままの屹立を差し出してくる。それはてらてらとヌメり、より生々しい存在となっていた。

「挿入れたいから自分で解してくれる？俺ね、何回かイッた後のグズグズまんこに挿入るのが好きなんだー♡」

「ハッ・・・」

信じられない位のクズさに腸が煮えくり返るが、この男からの要求を断れば、次は妹かもしれない。私は心の中で新山の不幸を願いながらも、目の前に差し出されたそれに手を伸ばす。新山の大き過ぎるそれは、浮き出た血管だとか、赤黒くヌメっているその様子が、まるでそれ単体の生き物のようにも感じられる。

「おいおいおーい！その顔止めてよ（笑）ねー、さっきも言ったけどさ？俺はエロい女が好きなの！むしゃぶりついてよ♡俺のちんこ美味しー♡堪んなーい♡って顔しながら舐めて！」

とんでもなく下品な要求に心底ウンザリするが、今はやるしかないのだ。私は気持ちを切り替えて、ニッコリと笑顔を作りながら、屹立へと顔を近付けていく。唇が僅かに触れるほどの微かなキスを繰り返しながら、徐々に下へと降りていく。

「・・・は？何してんだ」

困惑と、苛立ちの混じった眼で見下され、私は心の中で新山のことを嘲笑った。

「これが欲しくて堪らないので、誘惑してます」

新山を見上げるのは、意地で潤ませた眼。誘うような、艶を乗せて見つめながらそっと触れるだけのキスを繰り返せば、昂ぶりはググッと震えるように太くなる。ピクリピクリと跳ねるそれにキスをしながらクスリと微笑み、そしてもう少し顔を下げていく。

ーーーチュバッ♡

思い切り吸い付いたのは、屹立の下の陰嚢。

「ふふ、パンパンですね・・・♡」

レロレロと中にある球体を舐め転がせば、新山は「チッ」と舌打ちしながら私の頭へと手を伸ばしてくる。きっと無理矢理咥えさせようとしているのだろう。

（あんたの好きにはさせないんだから・・・！）

私は伸ばされた手にギュ♡と指を絡めて小首を傾げると、新山に微笑みかける。

「新山さんのおちんちん、今頑張って精子作ってるみたいですよ♡ほら、分かりますか？ドクドク脈打ってて、とっても可愛いです♡」

パクン、と陰嚢を咥内へ迎え入れれば、新山の身体が一瞬ビクリと固まった。今、これを噛み砕けば私の命は無いだろう。新山から目を離すことなく、唾液をたっぷりと眩して優しく優しく、満遍なく舐め上げていくと、新山は眉を顰めながら苛立たしげに前髪をかき上げた。

「ッ・・・お前、ハッ・・・本当に根性座ってんな？」

向けられる苛立ちに対しても、微笑みで返しながら、あむあむと唇で柔らかく陰嚢を刺激し、新山の脚に自身の身体を擦り付ける。股を開きながら新山の脛へと自身の秘裂を擦り付けると、ジンジンする程の快楽が湧き上がってくる。

「ンン・・・♡はぁ・・・♡舐めてたら興奮してきちゃったので、新山さんの身体ちょっとお借りしますね♡」

熱い溜め息を付きながら腰の動きを早めれば、新山の纏う空気が一気に変わったのが分かる。というか、咥内に収めていた陰嚢へ血液が集まってきた気がする。

私を見て、興奮してる。

ザマァ見ろと思う。この後酷い事をされるという予想はあるけど、それでもただこの男の言いなりになんてなりたくなかった。この男に逆らえない私が出来る意趣返しなんて、限られている。

「お前、どこまでイラつかせれば気が済むんだ？」

先程までの揶揄うような、馬鹿にするような軽薄な声ではなく、初めて聞く怒りを纏ったような荒々しい声だった。背筋がゾッとするような、恐ろしい組織のトップに立つ男の迫力のある声。身体が動かなくて、偽の笑顔さえも固まってしまう。そんな私を新山は力尽くで引っ張り上げて、無理矢理立たせた。両腕を掴まれて、床に僅かにつく足先が時折空を切る。

「キャッ・・・！」

「優しくしてやろーと思ってたのによぉ。なぁ、死ぬまで犯されてえのか？」

キリキリするような殺気のこもった瞳に見据えられ、緊張のあまり喉がカラカラになる。ここでの返答を間違えれば、本当に死ぬまで犯されてしまうかもしれない。しかしこんな状況でも、頭の中は酷く冷めきっていた。だから、こんな奴に気に入られる為の演技だってしてみせる。私は情けなく眉を下げながら、ウルウルと涙ぐみ、そして尻尾を振るように媚びた声を出す。

「やだ・・・晴哉さんっ・・・怒ると、怖いです」

怯えたようにポロポロと涙を零してみせれば、新山はポカンとした顔をする。私は畳み掛けるように新山の腕を握りながら、媚びた演技を続ける。

「晴哉さん、怖いのやだぁ・・・お願い。優しくしてぇ・・・？」

グスングスンと泣きながら訴えれば、新山は「はぁーーーー・・・」と深い溜め息をつきながらゆっくりと私を降ろした。

「こんなん反則だろ。キツいわ」

眉の間に深いシワを刻みながらも、雰囲気が随分と和らいだ。こんな仕事してる割には、割と甘い人なのかもしれない。

「え？何ですか？」

あざとらしく小首を傾げながら上目遣いで見上げれば、またもや小さな舌打ちが聞こえた。

「クソ。あ、いや、怒ってねぇから。あー・・・うん。取り敢えずヤろう。よし。うん。じ

ゃ、机に手ぇついてこっちに尻突き出して？」

新山は私をクルリと回すと、机に手を付けさせる。そして私が新山の言う体勢になった途端、突き出したお尻に昂ぶったそれを擦りつけてくる。グズグズまんこに突っ込むのが好きだと言っていた割に余裕の無い様子に、内心ザマァみろと思う。

「・・・挿れるな？」

耳元で囁かれた掠れ声に、身体はうっかりゾクリとした期待に震えてしまった。気付かれないようにすぐに下を向いたから、きっと誤魔化せた筈だ。

結局その後はクタクタになるまで抱かれ続けたが、最後まで手荒いことはされ無かった。最後には気を失っていたのでよく分からないのだが、恐らくは気に入られたのか、そのまま新山の所有するマンションの一室に連れて帰られることとなったのだった。